橋姫の巻「御前にて失はせ給へ」は誰の言葉か

阿久澤　忠

1.「御前にて失はせ給へ」

源氏物語の橋姫の巻の巻末近くに、弁の君が薫に向かって「御前(おまへ)にて失(うしな)はせ給(たま)へ。われなほ生くべくもあらずなりにたり、と〔柏木ハ〕のたまはせて」(新潮日本古典集成『源氏物語』298頁）という箇所がある。問題なのは、この会話のはじめにある「御前にて失はせ給へ」が、誰が誰に言った言葉なのか、という点である。というのはそれに続く「われなほ生くべくもあらずなりにたり」は、かつて柏木が弁の君に言った言葉をそのまま薫に伝えた部分であるが、その前にある「御前にて…」も同様に柏木が言った言葉なのか、それともこの部分は弁の君が目の前にいる薫に向かって言った言葉なのか、という点である。ただし、前者だとすると、誰に、は弁の君とは考えられなくなる。ここに使われる「御前」という語は、上位の者に対して言う語（代名詞「あなた様」）なので、柏木に仕えていた弁の君に対して柏木が使うことは考えられないからである。前後の記述の内容から見て、ここでの「御前」は女三宮（朱雀院の娘、源氏の正妻）ということになる。そうなると、「われなほ生くべくも…」の部分も女三宮に言った言葉ということになり、「御前にて…」から始まる柏木の言葉は全て女三宮に向けて言ったもので、弁の君はそれを女三宮に伝える役割を担ったということになる。この二つの説は既に古注にある。例えば『細流抄』は後者の説を、『孟津抄』は前者の説を取る。近世の『湖月抄』はこの二つの説を提示するのみである。現代の注釈書は専ら後者の説を取っているようである。

だが、前者の説が正しいのではないかというのが本稿の結論である。前後の叙述の展開と、その語句自体の検討によってである。

2. 叙述の展開から

「御前にて…」の直前には「ささやかにおし巻き合はせたる反故(ほぐ)どもの、黴(かび)くさきを袋に縫ひ入れたる、〔弁ハ〕取り出でて〔薫ニ〕たてまつる。」という地の文が置かれる。この文にある「反故」とは、あとの記述によってわかるが、生前の柏木が女三宮から送られた手紙や女三宮に出しそびれた柏木の手紙のことである。その反故を弁は取り出してきて薫に渡す。それを受けて「御前にて失はせ給へ」を読む時、弁の目の前にいる薫を弁が「御前」と呼び、あなた様がその反故を捨てて下さい、とあるのが、すなわち後者の説がこの文の流れから見て正しいように見える。

この反故については、右の文に先立つ弁の会話文にある。「御覧ぜさすべきも

のもはべり」(296頁)がそれであり、それに続けて「今は何かは、焼きも捨てはべりなむ」の「焼きも捨て」が「失はせ」と対応する。「今は何かは、焼きも捨てはべりなむ」とは、弁がかつてその反故を焼き捨てようと思ったことを言う。しかし薫に会えた今は自分はそうしないから、自分に代って薫がそれをしてくれ、というつながりで考える時、後者の説が正しいように見える。

だが、弁が薫に柏木の手紙を捨てるようにと言うのは不自然なことではないだろうか。その会話より以前にあった弁の会話によって、薫は自分の父が源氏ではなく柏木であることをはっきりと知る。その父の大切にしていた手紙を受け取ったら、息子はそれを大切に持っていたいと思うのが自然であろう。それなのにその父の形見というべきものを捨てろと他人の弁がいうのは変ではないだろうか。

後の巻ではあるが浮舟の巻に「あはれなる御仲に、心とどめて書きかはしたまへる文(ふみ)は、人にこそ見せさせたまはざらめ、ものの底に置かせたまひて御覧ずるなむ、ほどほどにつけては、いとあはれにはべる。」(87頁)とあって、恋する人からもらった手紙は文箱の底に大事にしまって時々見たりするものだ、という記述がある。入水を決意した浮舟が「むつかしき反故など破(や)りて、おどろおどろしく一度(ひとたび)にもしたためず、燈台の火に焼き、水に投げ入れさせなど、やうやう失ふ。」とあって、匂宮からの手紙を捨てているのを女房の侍従が見とがめて言っているものである。

また幻の巻では「落ちとまりてかたはなるべき人の御文(ふみ)ども、破(や)れば惜(を)し、とおぼされけるにや、少しづつ残したまへりけるを」(151頁)とある。女君たちからの恋文を源氏は破り捨てるのは惜しいと思って残してある、と述べる箇所である。だが出家を決意した源氏はその手紙を破り捨ててしまう。浮舟も源氏も大切な手紙を捨ててしまうのは、入水とか出家とかの事情があり、それらを残して置いても意味がないからである。「御前にて失はせ給へ」で、これを弁が薫に言ったとすると、その薫に目下、そうした事情はない。しかも浮舟や源氏の場合は自らが決意して手紙を捨てるのであって、それを他人から、しかも薫と比べ身分のはるかに下の弁からそうしろと言われるいわれはあるのだろうか。

では逆に「御前にて…」を柏木が女三宮に言ったとしたら、柏木がそう女三宮に言わなければならない事情があるのだろうか。女三宮のもとにこうした手紙がいつまでも残ったとしたら困る事態とは何なのであろうか。本来ならいつまでも女三宮のもとに残しておいてもらいたいと考えられる手紙をである。しかしもし女三宮のもとに残って、もしそれが他人に読まれたとしたら、薫が柏木の子であることと、柏木と女三宮の密通があったことの動かぬ証拠が示されることになる。一番読まれたくない他人とは、女三宮と同じ六条院に住む夫の源氏であろう。しかも柏木が女三宮にあてた手紙を女三宮の不注意によって源氏に読まれたことが既にあった。そのことを柏木は知り、密通を源氏が知ったことがわかった。だからこそ今度こそはその証拠が残らぬように、女三宮にその手紙を捨てるように言ったのではないだろうか。

「御前にて……とのたまはせて」に続く弁の会話を見ると、「この御文を取り集めて賜はせたりしかば、小侍従にまたあひ見はべらむついでに、さだかに伝へ参らせむ、と思うたまへしを」とあって、柏木がその手紙を弁に渡したので、小侍従に今度会った時にその手紙をお届け申してもらおうと思っていたが、と述べる。「小侍従」は女三宮の乳母の娘であり、柏木と女三宮の仲立ちをして二人の手紙のやりとりを行った人物である。二人の密通を源氏が知ったということを知らせたのもこの小侍従である。二人の密通と薫の出生の秘密を知るのは、源氏を除けばこの小侍従と弁のみである。この二人は又従姉妹同士でもある。その手紙を渡されたのを受けて、弁はこの小侍従に「さだかに伝へ参らせむ」と思ったのだという。「伝へ参らせむ」と、謙譲語の「参ら(る)」が使われているので、小侍従がへり下ってものを言う相手、すなわち女三宮に「伝へ」るということになる。つまり、小侍従を介して柏木から預かった手紙を女三宮に弁は渡そうとするが、そのことが「御前にて……とのたまはせて」に続いて示されているのは「御前にて失はせ給へ」と柏木が女三宮に言ったからではないだろうか。そのことを受けて弁は、その柏木の言ったままの言葉を小侍従に伝え、それも含めて手紙も間違いなく女三宮に手渡そうとしたのではないか、それが「さだかに伝へ参らせむ」の中味であると考えられる。

しかし右の引用文に続けて「やがて別れはべりしも」とあるように弁は二度と小侍従に会うことができなかった。その事情については「御前にて…」に先立つ弁の会話に述べられる。「われなほ生くべくもあらずなりにたり」と言った柏木は間もなく亡くなり、弁は京を去って九州に十五年ほど過ごし、京に戻った時には小侍従はその間に亡くなっていた。薫と出会ったのはそれから五、六年あとのことなので、柏木が亡くなってから二十年余り弁は柏木の手紙を誰にも知らせずに持っていたことになる。しかしこの手紙を弁は焼き捨てようと思った、ということは先に述べた。そうしようと思った理由については「かく朝夕(あさゆふ)の消えを知らぬ身の、うち捨てはべりなば、落ち散るやうもこそ」(296頁)とある。自分は高齢(約六十歳)でいつ死ぬか分からないので、この手紙をこの世に残しておいたら(「うち捨てはべりなば」)、いつ人目に触れないとも限らないから(「落ち散るやうもこそ」)ということである。しかし薫はまだ若く(この時二十二歳)そうした心配は考えられない。しかし女三宮の場合、年齢についてはともかく、そのまま手許に置いていたら人に見られる危険性がある。だからそれを女三宮が自分で捨てるよう柏木が言い、それを弁が聞いていたからこそ小侍従が亡くなった今、女三宮に代って弁は自分で焼こうとしたのではないだろうか。柏木から預かった大切な手紙を弁自らの考えで焼き捨てようとしたとは考えにくいからである。

この手紙のことは「御覧ぜさすべきものもはべり」という記述で示されていることも先に述べた。ここで「ものも」と助詞の「も」が使われているのは、この手紙に先立って薫に伝えることがあったからである。それはその手前に記された「〔柏木ハ〕今はのとぢめになりたまひて、い

ささかのたまひ置くことのはべりしを」とあることである。「いささかのたまひ置くこと」という言い方はこの対面（「十月になりて、五六日のほどに」）に先立つ、一週間か十日程前（「秋の末つかた」、九月下旬）に初めて二人が対面した際の弁の会話にも使われている。「〔柏木ガ〕今は限りになりたまひにし御病（やまひ）の末つかたに、召し寄せて、いささかのたまひ置くことなむはべりしを」（282頁）がそれである（「はべりしを」で受けているのも同じ）。「今は限りになりたまひにし御病の末つかた」と、柏木の臨終の際のことが書かれるが、「十月になりて…」の場合も同様の位置に「今はのとぢめになりたまひて」と同様のことが書かれる。

しかも両者が似ているのはさらに二点ある。一つはそれらの語句のあとに「秋の末つかた…」では「聞こしめすべきゆゑなむ一事（ひとこと）はべれど」、「十月になりて…」では「いかにしてかは聞こしめし伝ふべき」とあって、その柏木が弁に言ったことは薫に是非とも伝えたいことだったと書かれている点である。二つ目は、それらの語句の前に、前者では「御心よりはた余りけることを、をりをりうちかすめのたまひしを」とあって、柏木が女三宮に寄せる思慕の情を弁に言っていたことが書かれ、後者では「〔柏木ガ〕御心よりあまりておぼしける時々、ただ二人〔弁ト小侍従〕のなかになむ、たまさかの御消息の通ひもはべりし」とあって、柏木が女三宮に思いを寄せること、さらには二人の手紙のやりとりを取り持ったことが書かれる。弁が薫に伝えたい「いささかのたまひ置くこと」の具体的な内容は両者共に示されていない。しかし柏木と女三宮のことであることは示唆されている。しかも後者ではその語句のあと「御覧ぜさすべきものもはべり」と、あとに出てくる「反故」が暗示され、しかもその「もの」は柏木と女三宮の間の手紙であろうことも示唆されている。そこを受けて「御前にて失はせ給へ」の箇所を読むと、その語句のあと「われなほ生くべくもあらずなりにたり、とのたまはせて」と、ここでも柏木の臨終の状態が示される。それに続いて、小侍従を介して柏木と女三宮の間にとりかわされた手紙（「反故」）のことが記される。この手紙のことが「御覧ぜさすべきもの」の具体的な物である。それは弁から薫に手渡された。では臨終の際に柏木が言ったことで、弁が今薫に伝えたい柏木の具体的な言葉とは何か、と言えば、その一番言いたい核心の部分こそが「われなほ生くべくも…」と共に言った「御前にて失はせ給へ」ではないだろうか。

だがこの言葉をなぜ弁はわざわざ薫に伝えたかったのであろうか。それは薫の父が柏木であることを伝えた以上、柏木の遺言と手紙を託せる人物は息子である薫以外にないと思ったからであろう。しかも「御前にて…」は女三宮に書いた手紙よりもあとに言った言葉である。女三宮に言った父の最後の言葉である。しかもそこには源氏の子として生きていってほしいという大切なメッセージも含まれている。

3.「御前」の用法から

以上、「御前にて失はせ給へ」の前後の叙述の展開から、その言葉が、柏木が女三宮に向けて言ったであろうことを述べ

てきた。だがそうであると断じるのにためらわれるのが、この言葉がいきなり柏木の言葉から始まるという点である。弁の会話なのに、のっけから他人の会話から始まるという点である。しかし当時の読者にあっては、そこに使われている言葉によって、これが柏木が言った言葉であるとわかったのではないだろうか。

注目するのは「御前」という語と「給へ」という「給ふ」の命令形である。

ここではまず「御前」について述べる。

「御前」は、ここでは対称の人称代名詞として「あなた様」の意であると考えられる。「御前」を「前」の尊敬語「おん前」の意と考えられないこともないが、内容は反故を（焼き）捨てるということなので、あえて「前」であることを示す必要はないであろう。

「御前」の用例は源氏物語全体で189例見られる（『源氏物語大成索引篇』による）。そのうち「御前にて…」と同様に会話文の中で人を指して使われていると考えられる例は12例である。誰に、誰が、どんな本文箇所において使われているのかを示したのが次の表である。数字を（　）で囲って示した例は、目の前にいる相手を指して言った場合であり、「あなた様」の意である。他は貴人の敬称であり、「お方」「ご主人様」の意である。

この12例中4例に見られるのが、「誰が」が、「誰に」の「誰」に仕える女房がなっ

	誰に	誰が	本文箇所	巻・頁数
(1)	源氏	源氏の乳母	ただかく御前にさぶらひ御覧ぜらるる	夕顔・123
②	夕顔	夕顔の女房・右近	御前にこそわりなくおぼさるらめ	夕顔・151
③	斎宮（後の秋好中宮）	源氏	かけまくもかしこき御前に	賢木・135
④	玉鬘	豊後の介	これは御前に参らせ給へ	玉鬘・299
(5)	弘徽殿女御	近江君	御前のつらくおはしますなり	行幸・177
⑥	落葉宮	落葉宮の従姉妹・少将の君	御前には、ただわれかの御けしきにて	夕霧・62
(7)	匂宮	真木柱と按察使大納言の間に生まれた若君	御前にはしも	紅梅・191
⑧	中君	中君の女房	わが御前をば、幸人とこそ申さめ	宿木・239
⑨	浮舟	浮舟の女房・侍従	御前にも、ものをのみいみじくおぼしためるは	浮舟・90
(10)	浮舟	老いた尼	御前に疾くきこしめせ	手習・222
⑪	浮舟	尼の一人	御前にはかかるをこそたてまつらすべけれ	手習・248
(12)	明石中宮	明石中宮の女房・小宰相	御前にだにつつませたまはむことを	手習・252

ている例であり、②⑧⑨⑿の場合である。⑴の例の「誰が」は乳母の場合であるが、「誰に」の源氏を育てた女性であり、身近にいて親しいという点では女房と共通していよう。⑽⑪の例の「誰が」は「誰に」の浮舟の世話をしている尼たちである。⑽は浮舟の食事について、⑪は浮舟の着る衣服についてものを言っている。こうした尼の立場も女房の立場に近いものであろう。

⑥の場合は「誰に」が落葉宮（柏木の妻）、「誰が」が落葉宮の従姉妹の場合であり、しかもこの女性は落葉宮の母（御息所）に幼い頃から育てられた。落葉宮とは身内の親しい関係にあると言えよう。

⑺の「誰に」の匂宮と「誰が」の若君とは血縁関係にはないが、匂宮はこの若君を日頃からかわいがっており、若君の方でも「馴れきこゆ」（190頁）とあって甘えている。

以上の9例から言えるのは「誰に」と「誰が」の「誰」が互いに身近で親しい人間関係にあるという点である。目の前にいる「誰に」に対して直接「御前」を使っている例がその9例中4例と、半分近くあるのもその親しさを示す表れであろう。こうした用例から見て、「御前にて失はせ給へ」を弁が薫に言ったとは考えにくいのではないだろうか。弁と薫が初めて言葉を交わしたのはここが二度目であり、しかもその初回はつい十日程前のことなのである。なのにその薫に面と向かって「御前」と言うのもいっそう考えにくいのではないだろうか。

残る3例中③の例は、柏木が女三宮に言ったと見る場合と類似した点がある。

「かけまくもかしこき御前に」とて、
木綿（ゆふ）につけて、
　鳴る神だにこそ、
　　八洲（やしま）もる国つ御（み）神も心あらば
　　飽かぬわかれの仲をことわれ
　思うたまふるに、飽かぬここちしはべるかな

とあり。

「御前」は源氏の会話文「かけまくも…」において、斎宮（母は六条御息所）に対して使われている。そのあとの「鳴る神だにこそ」から「ここちしはべるかな」までが斎宮にあてた源氏の手紙の部分である。源氏はその手紙を直接斎宮に手渡したとは考えにくい。人を通して手渡したのであろう。源氏の「かけまくも…」の言葉も人を通して伝言されたものであろう。「御前にて失はせ給へ」を柏木が女三宮に、と考えた場合も人（小侍従）を通しての伝言である。しかもそのあとに手紙を渡す、という点も同様である。男性が女性に、という点も同様である。

残る④の場合は、「豊後の介」が食事を玉鬘（ここでの「御前」）に差し上げるようにと指示するところに使われている。指示されているのは「古き下衆（げす）女」と見られる。豊後の介は玉鬘に対して謙譲語の「たてまつる」を使っている。玉鬘の父は内大臣なのでそれを受けてのことと考えられる。男性が身分の高い女性に対して、しかも直接その女性の顔を見ては言っていないという点で、柏木が女三宮に、と見る場合と似ていよう。しかもこの例では「給へ」と共に使われている。

しかし残る⑸の例は、弁が薫に、と見る場合と似ている。⑸は近江君が弘徽殿女御を前にして、その女御のことを指し

て、あなた様が薄情でいらっしゃるのですと恨むところに使われている。近江君と女御は右の内大臣を父とする姉妹ではあるが、近江君は妾腹の娘であり、しかもつい最近内大臣の娘だとわかって女御のもとに出仕した人物である。女御とは手紙のやりとりを一度したことが書かれているが、対面して話をするのはここが最初である。ほぼ初対面で、身分のきわめて高い人物に向かって、その人物のことを指して「御前」を使うのは、弁が薫に、という場合と似ていよう。しかもその会話の内容が、相手に要求している、という点でも似ている。近江君は女御が自分を尚侍にしてくれないのを恨むが、それは裏を返せば、自分を尚侍にしてくれと要求していることだからである。こうした類似した例があることは、弁が薫に、とする説を後押しするものであろう。しかし近江君と弁とでは人物がちがう。近江君は貴族の人々の中にあって変った物言いをする人物である。この直前の会話では玉鬘のことを「かれも劣り腹なり」と言うが、それに対し地の文で「あふなげに」、無遠慮であると記される。この会話を聞いた女御も「かたはらいたしとおぼして、ものものたまはず」とあきれている。「御前のつらくおはしますなり」も失礼な物言いであろう。その場にいた柏木はそれを聞いて近江君をからかう始末である。弁はその柏木にかつて仕え、今は八宮に仕えている。そのような人物が近江君のような物言いをするとは考えにくいことである。

ところで、「御前」は漢字表記で書かれる時、「ごぜん」と読んだ可能性がある。現に『源氏物語大成索引篇』では底本（その多くが大島本）で漢字表記の「御前」である場合、その用例を「ごぜん」の項目に入れている。しかしながらそれらの用例の中には逆に「おまへ」と読まれた可能性のある用例もあるであろう。同じ青表紙本でも定家の青表紙原本により近い明融本には『源氏物語大成』の底本で「御前」と表記されたものが「御まへ」と表記された例が5例（若菜上巻に2例、浮舟巻に3例）あるからである。「御前にて失はせ給へ」の場合も「御まへ」である。そこで『源氏物語大成』で「御前」と表記された全用例49例（ただし「御前駆」の意で用いられた例は除く）を見ると、会話文の中で人を指して使われていると考えられる例は4例ある。そのうち3例までが、その場にいない人物を指して言っている例である。それは、源氏が父・桐壺帝に対して、浮舟の乳母が浮舟の姉の中君に対して、中君に仕える女（め）の童（わらは）が中君に対してである。残る1例が目の前にいる相手を指して言っている例であるが、その例は「御前」の⑸の例と同じ場面で、同様に近江君が女御に対して使っている例である（「ただ御前の御心のあはれにおはしませば」）。

以上の例から見ても、「御前にて失はせ給へ」は、柏木が女三宮に、の可能性の方が高いのではないだろうか。

4.「給へ」の用法から

次に「給へ」の用法を検討するが、命令形「給へ」の用例は源氏物語全体で371例見られる。これらの中には会話文の中で弁が薫に使った例と、柏木が女三宮に使った例が1例ずつある。前者の例は、

○御文など見せさせ給へかし。（東屋

巻333頁）
であり、浮舟に手紙などおやりになって下さい、と言っているものであり、手紙がらみの内容という点で「御前に…」の場合と似ている。後者の例は、

○ただ一事（ひとこと）〔アナタノ〕御声を聞かせ給へ。（若菜下巻208頁）

であり、柏木が女三宮と契った、そのきぬぎぬの別れの際の会話である。

前者にも例があることから弁が薫に、ということも考えられる。

ところで会話文の中で、他に薫に対して「給へ」を使った人物、女三宮に対して「給へ」を使った人物を見ると、前者の人物には母親の女三宮（1例）、兄の夕霧（1例）、八宮（1例）、八宮の娘・大君（4例）、太政大臣の娘・玉鬘（2例）、今上帝の皇子で甥の匂宮（2例）がいる。これらの人物に対してはいずれも地の文で「給ふ」が使われる。それに対して弁に対しては「給ふ」は使われない。一方、後者の人物には夫の源氏（4例）、父親の朱雀院（1例）がいる。両人に対しても地の文で「給ふ」が使われるが、柏木に対しても「給ふ」が使われている。

「給へ」というのは、「給ふ」そのものは尊敬語であっても、それが命令形を取る時は、相手に対して、命令、要求、依頼の内容を言うことである。そうすることができるのは身分の高い人物が身分の低い、もしくは同じくらいの人物に対してか、さもなければ女房が主人に、のような親密な関係においてかであろう。あるいは親族関係や友人同士、恋人同士の関係においてであろう。「給へ」の371例中、会話文で使われた例は314例見られるが、そのほとんどが右のような場合である。例外は近江君が女御に対して使った「尚侍におれを申しなし給へ」（行幸巻178頁）くらいである。にもかかわらず、弁が薫に対して「給へ」を使っている。だが弁が「給へ」を使った例はそこだけである。それに対し柏木が「給へ」を使った例は右の、女三宮に対してだけでなく、親友の夕霧に対しても（5例）、小侍従に対しても（3例）、母親に対しても（1例）使っている。

ではなぜ弁は右の会話文で薫に対して「給へ」を使ったのであろうか。その使用箇所は「御前にて…」のあった橋姫の巻よりも五つあとにある巻である。その間約五年が経過しており、弁と薫の関係は親密の度を深めてきた。総角の巻では弁に薫は大君に寄せる思いを述べ、弁はそれを受けて薫を大君の寝所に導き入れようともした。宿木の巻では浮舟のことを弁から詳しく聞き、東屋の巻では弁に浮舟への仲介を頼む。右の弁の「給へ」はその場面でのものである。そこに至るまで薫の方は弁に対して「給へ」を8回使っている。しかもそのうち終りの3例が、右の弁の「給へ」の場面においてである。その3例はいずれも浮舟に関する依頼であるが、その3例目は「その旅の所尋ねおき給へ」と、京にいる浮舟の隠れ家がどこにあるのか、それを確かめておくようにと依頼している。それを承諾した弁が、その場所は薫の邸の近くだから訪れるのに先立って手紙などをおやりになって下さい、と言うところに「給へ」が使われている。ここで「給へ」を弁が使っているのは二人の親密の度が深まったことによろう。それに加え、薫にこの場でたて続けに何度も「給へ」を使われたので、それで

は私の方でも、という思いからでもあろう。それに対し薫の方は橋姫の巻の弁との初対面の場で既に「給へ」を使っている（「かならずこの〔柏木ノ遺言ノ〕残り聞かせ給へ」）。薫のような身分の高い人物であれば、初対面の場であっても「給へ」は使えるであろう。しかし弁のような身分の者の場合、ほぼ初対面の場で薫に「給へ」を使うことはできなかったのではないだろうか。

それに対し柏木の場合、女三宮に「給へ」を使うことは、会話文以外の手紙において2例見られる。それは女三宮に出した最後の手紙においてである。

> 言の葉の続きもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、
>
> 行方なき空の煙となりぬとも
> 思ふあたりを立ちは離れじ
>
> 夕はわきてながめさせ給へ。とがめきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすくおぼしなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせ給へ。（柏木巻274頁）

この二つの「給へ」を受けて柏木が最後に言ったのが「御前にて失はせ給へ」なのではないだろうか。

5. 柏木の最後の歌

以上、叙述の展開と「御前」「給へ」の用法の検討から、「御前にて失はせ給へ」は柏木が女三宮に言った言葉であると考えられる。だがなぜ柏木は自らの手でその反故を捨てなかったのであろうか。既に述べたように源氏や浮舟はそうしている。「われなほ生くべくもあらずなりにたり」という状態であったら弁に捨てさせることもできたであろう。しかしそうしなかったのは、右の手紙のあとに書いた手紙があったからであろう。それを女三宮が読んだ後捨ててほしかったのだ。その手紙を弁のもとから去って薫は袋を開けて読んだ。

> …陸奥紙五六枚に、つぶつぶと、あやしき鳥の跡のやうに書きて、
>
> 目のまへにこの世をそむく君よりも　よそにわかるる魂ぞ悲しき
>
> また端に、
>
> めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふるかたはなけれど、
>
> 命あらばそれとも見まし人知れず　岩根にとめし松の生ひ末

あとの歌はこの歌を読んでいる薫の、その誕生直後のことを詠んだ歌である。その手前の文面にある「二葉」がその薫をたとえている。その薫については「うしろめたう思うたまふるかたはなけれど」、つまり心配することは何もないが、と述べる。これは源氏の子として育つのだからということであるが、これは先に述べた「御前にて失はせ給へ」と言った意図、すなわち、薫が柏木の子であると知られたくないという意図と照応するものであろう。歌の下の句にある「岩根にとめし松」も薫をたとえた言葉である。そしてこの言葉は既に指摘されているように、薫が五十日を迎えた時に源氏が詠んだ歌にも薫をたとえて詠み込まれている（「岩根の松」柏木巻301頁）。このことはその源氏の歌との関連で右の歌を読むことを伝えるものであろう。同様に前の歌も、先の柏木の「行方なき…」の歌と関連付けて読むことを求めるものであろ

う。両者の歌の直前に同じ語句「あやしき鳥の跡のやうに」が置かれているのもそれを示すものであろう。「行方なき…」の歌は末句「立ちは離れじ」とあって、思いは女三宮を離れることはあるまいと述べる。それに対しこの歌では「よそにわかるる魂ぞ悲しき」とあってそのことは書かれず、女三宮のもとを去ることのみが示される。それと同様に「給へ」の内容も「わきてながめさせ給へ」「絶えずかけさせ給へ」とあって、自分のことを心にかけ続けてほしいと述べるが、最後の「給へ」の「御前にて失はせ給へ」ではそんな柏木の思いを断ち切るような言い方になっている。しかし柏木はたとえ最後にそう言ったとしても、最後の歌の「魂ぞ悲しき」という思いは、この手紙が焼き捨てられようとも女三宮の心に残ることは願ったであろう。むしろ女三宮が焼き捨ててしまうことでその最後の思いが女三宮の心にだけ残ることを願ったがゆえの「御前にて失はせ給へ」ではなかったであろうか。

歌の関連でいえば、その柏木の歌の上の句にある「この世をそむく君」とは、薫出産直後に出家した女三宮のことを言うが、後の宇治十帖の最後で薫は出家した浮舟のことを横川僧都の口から聞いた。その浮舟の出家について「この世には亡(な)き人と同じやうになしたること」(夢浮橋264頁）と記されるが、薫はその時父のその歌のことを思い起こしたのではないだろうか。

◇表現研究関連文献紹介

小林千草著『『明暗』夫婦の言語力学』(東海大学出版会、平成24年12月刊、￥2,300＋)

本書は、月刊誌『望星』に六年に渡って連載された同題の文章に書き下ろしを加えたもので、『明暗』の物語展開にそって進む八章八十八節からなる。

著者は、『明暗』の登場人物による会話（コミュニケーション）に視点を据え、そこに現れる江戸時代末期～明治のことば・表現にこだわりながら、発話の裏にある心理や会話でひきおこされる相互変化を「言語力学」と名づけて考察するとともに、漱石が仕組んだ「ことばの伏線」をも指摘して、長編『明暗』をじっくりと読み解いている。しかし、本書の魅力はこうした内容に限るものではない。

作家千草子として『続明暗』の構想をも語り、活字離れの学生に接する教育者として『明暗』未読を考慮した文筆をもする。妻お延に京ことばがないのは不自然と京都育ちの言語学者が顔を出したかと思えば、「連れそった夫婦なら…おありであろう」と一婦人として津田夫婦の会話を巧みに説く。「助言（じょごん）と読む」と講ずる一方で「ヤベェーという心境」と俗語も織り交ぜる、等々。著者の多彩な個性が満載の本書を専門的書籍とのみ紹介してはやはり不足である。

ことほどさように充実した内容の本書は、読者に活用の楽しみを与えてくれる。学生ならばまず未完の名作への手引きとするのだろうか。未熟な教育者は輪読、演習、文章表現への使用を思い巡らした。手に取る者がそれぞれに活用を考え得る書と言えるだろう。　（梅林博人）